

(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	在宅療養患者の転帰に関する実態調査 ～年齢・疾患・紹介元・退院カンファレンスの有無による比較～
演者名	一戸 由美子 ¹⁾ 佐藤 幹也 ¹⁾ 矢尾 知恵子 ²⁾ 渡邊 厚博 ³⁾
所属	河北医療財団 河北家庭医療学センター 診療部 ¹⁾ 河北訪問看護・リハビリステーション阿佐谷 ²⁾ 河北医療財団 河北家庭医療学センター 運営支援室 ³⁾

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告 2. 症例シリーズ報告 3. コホート研究 4. 症例対照研究 5. 調査研究 6. 介入研究 7. 二次研究 8. 質的研究 9. その他研究	NO.
		5

目的

厚労省の統計では、年間死亡者数は 2040 年には 166 万人に達するとされており、今後は看取りを含めた在宅での終末期医療のあり方が重要な課題となっている。そこで今回、河北家庭医療学センター（以下、当センター）における在宅療養患者の転帰に関する調査を行った。

方法

2011 年 9 月から 2014 年 8 月の期間に当センターの訪問診療を終了となった患者 193 人(7.9 歳±13.6、男性 102 人、女性 91 人)を対象に、転帰に関する実態調査を後ろ向きに行った。

結果

在宅死亡 88 人 (45.5%)、病院死亡 81 人 (41.9%)、軽快終了 11 人 (5.6%)、施設入所 4 人 (2.0%)、紹介 8 人 (4.1%)、その他 3 人 (1.5%) であった。がん (89 人) / 非がん (104 人) 別にみると、がんの在宅死亡率 (60.6%) は非がんの在宅死亡率 (32.6%) より有意に高かった。非がん患者のうち、疾患別分類でみた在宅看取り率は、老衰が 100% と高く、心疾患が 46.1% と比較的高かったが、その他の疾患では有意な差がなかった。患者の紹介元をみると、同法人の急性期病棟 (40.9%)、同法人の外来 (30.0%)、近隣病院の急性期病棟 (18.1%)、大学病院の急性期病棟 (9.3%) の順で依頼が多かった。紹介元と転帰との関係では、同法人からの紹介患者の在宅看取り率 51.1% は、外部医療機関からの紹介患者の看取り率 32.1% に対して高かった。特に大学病院からの患者の在宅死亡は 27.6% と最も低かった。訪問診療開始前に退院カンファレンスが開催された群 (73 人) とされなかった群 (120 人) の間に転帰に関する差異はみられなかった。患者の年代別の転帰にも有意な差異はなかった。

考察

死亡原因統計では、がんが死亡の第一位であるが、残りの約 7 割が非がん疾患であり、非がん患者の在宅支援と終末期医療のあり方を検討する必要があると示唆された。